

テーマ:

“ふくしまニッコリカフェ”を開き、 福島の元気を復活させっぺ!

福島県南会津郡下郷町立江川小学校

湯田 祥子 先生

●4・5年生(複式学級)

●総合的な学習

この活動の特徴

「凜々子」活用のポイント①

風評被害に負けるな!
自ら育てた野菜で
みんなに笑顔と元気を届ける

「凜々子」活用のポイント②

自分たちで工夫しながら
メニュー開発!
料理でもてなす喜びを体験

「凜々子」活用のポイント③

文化祭でカフェを
オープン!
活動の成果を地域に発信

活動のねらい



- 自分たちで「凜々子」を育て、収穫することの喜びを味わう。
- 自分たちで収穫した野菜を使って料理を作ることによって地産地消のよさや安全性を実感する。
- 自分たちの手で作った料理で、もてなすことの喜びを味わう。
- 収穫した「凜々子」を使って、何が作れるか調べたことや活動したことのようにすをまとめ、発表する場を設けることで、活動への達成感を味わう。

活動の概要と流れ

対象学年 : 4・5年生 1クラス (15名)

実践期間 : 5月～11月

時期	学習活動
5月24日	・各自、自分の苗を決めて、畑に植える。交代で世話をする。
6月下旬	・尻腐れ症が発生。地域の畑の先生に協力いただきながら対処し、世話を続ける。
8月31日	・クラス全員で約10kgのトマトを収穫する。きれいに洗って冷凍保存する。
9月2日	・ゼリーとシャーベットを作って試食、先生方や他学年にもふるまう。
10月21日	・地域のパン屋さんに行き、パン作り体験をする。
11月4日	・りりこジャムを作り、カナッペにして試食。りりこパンのレシピを考える。
11月11日	・文化祭に向けて、りりこパンを約100個作る。
11月12日	・江川っ子まつり(文化祭)で“ふくしまニッコリカフェ”を開き、全校児童と保護者、地域の方に、活動のようすを発表する。手作りパンを提供し、自分たちが育てた地元の野菜のすばらしさを伝える。りりこジャムをバザーで販売する。



ここがポイント! 取り組みの工夫

地域に元気と笑顔を取り戻そう! 子どもたちの思いが活動の出発点に

震災以降、福島というだけで敬遠されるという風評被害を受けるようになり、子どもたちは、学区である湯野上温泉、大内宿などの観光地も人が減ってしまうという現実を見ていた。下郷町は放射線量も低く安全だということもあり、野菜を育てて、その野菜を使ったカフェを開き、地域のみみんなに元気と笑顔を取り戻してもらおうという思いから、今年度の栽培活動が始まった。

栽培の途中で多くの実が腐ってしまうという問題に直面したが、子どもたちは目標達成に向けて、水やりの量を考えたり、地域に住む畑の先生に教えていただいたりしながら世話を続け、夏休み明けには全員で約10kgの真っ赤に完熟したトマトを収穫した。



取り組みの裏話...

“ふくしまニッコリカフェ”の企画と実践

“ふくしまニッコリカフェ”は、子どもたちから「江川っ子まつり(文化祭)では、自分たちが育てた野菜を使ってカフェを開きたい。」「風評被害で元気がない地域の人たちにも、自分たちが育てた安全な野菜を食べてもらい、笑顔になって欲しい。」という意見が出て、子どもたちが主体的に取り組んだ。カフェで提供するメニューや看板、発表する内容なども、子どもたちが話し合いながら決めていった。

ジャムを作るとたくさんできあがったので、カフェで提供するほかに、バザーでも販売しようということになった。児童がデザイ

デザート作りでトマトの苦手克服! おもてなしメニュー開発に活かす

普通のトマトよりも赤く、ピカピカに光っている「凜々子」は一体どんな味がするのだろう・・・? 子どもたちはわくわくしながら、暑い時期においしく食べられるシャーベットとゼリー、2種類のデザートを作った。口に入れた瞬間、「おいし〜!」とあちこちで歓声が上がリ、トマトが苦手な子どももおいしく食べる事ができた。



「凜々子」のおいしさを知った子どもたち。残った約8kgのトマトは、甘くて誰もが食べやすく、保存できるジャムにすることにした。

全員で凍ったトマトの皮をむき、焦がさないよう交代で鍋をかき混ぜながら、大量のジャムを完成させた。クラッカーにクリームチーズとできたてのジャムをのせて食べてみると、あまりのおいしさにみんなの手が止まらなくなった。

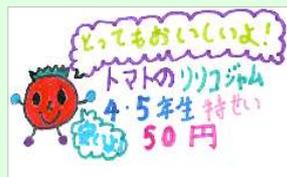


カフェで何を出すかの話し合いでは、ゼリー、クッキー、ケーキ等の案が出たが、文化祭前日に作ることやジャムに合うという点から、パン屋さんで体験学習したことを活かして、りりこパンとじゅうねんパン(下郷町特産のエゴマ、自校栽培)に決めた。

活動のまとめでカレンダー作り。旬のおいしさを伝える

今年育てた野菜の栄養やレシピなどを、12ヶ月分のカレンダー形式で模造紙にまとめ、カフェで発表した。

8月のテーマは「凜々子」とし、自分たちが育てた「凜々子」の栄養やレシピ、クイズ等について、たくさんの人に伝えることができた。



ンしたラベル(上図)を貼って販売すると、カフェで食べてくださったお客さんの評判もあり、ジャムを買うために並んで待つお客さんもいて、あっという間に完売した。

お客さんに喜んでもらったことで、子どもたちも喜びを感じることができ、充実した一日となった。



子どもたちの気付き、実践の成果

自分の手で育てる大変さを実感。食べ物を大切に作る心が育つ

いつもあたりまえのように食べていた野菜を自分の手で育てたことで、収穫の大変さを実感することができた。

また、収穫の喜びも味わうことができ、食べ物を大切にしようという心が育った。トマト嫌いの子どものゼリーやシャーベットなど、甘いデザートにすることでトマト独特の臭みが消え、喜んで食べる事ができた。



【児童の感想より】

・今もぼくはトマトはきらいだけど、ジャムは食べられます。でも生やジュースなど、トマトのふつうの味がだめです。つまり、トマトのきらいなところは味です。でもがんばって食べられるようにしたいです。

・リリコはみんなにはおいしいと言われているけど、ぼくはきらいです。でもリリコシャーベットを食べたらすごくおいしくて、少しすきになりました。

自分たちが育てた野菜で、地域の人を笑顔に！みんなで力を合わせて、全員で達成感を味わう

子どもたちは、自分たちの手で収穫した野菜を調理する喜びを味わうことができた。



また、カフェを開いたことで、お客さんに自分たちの料理を食べてもらって笑顔になってもらうことができ、達成感も味わうことができた。お客さんからパンやジャムのレシピを聞かれることもあり、人に伝えたり、教えたりすることで、子どもたちの自信にもつながった。



クラス全員（複式学級、特別支援児童含む）で協力し、ひとつのことを成し遂げるといふ一連の活動を通して、互いに助け合い、思いやる心が一層育った。一人一人の良さを再確認することができ、クラスの

絆が深まった。



先生から一言！ 実践を通して

年度当初は、「凛々子」を特に意識していたわけではなく、他の野菜と同様に育てていました。ところが、夏の収穫で真っ赤に完熟した「凛々子」を見て、まずは子どもたち自身が元気になり、それがこの活動の大きな原動力となりました。エゴマも収穫しましたが、これに比べてトマトの収穫は、子どもたちがわくわくするような楽しい体験だったのだと思います。

赤い色は人を元気にする色です。「凛々子」の赤い色が、子どもたちの「福島のを復活させっぺ！」という思いとつながり、子どもたちの中で次々と活動のアイデアがふくらんでいきました。そして、「みんなでやればできるんだ！」という成功体験が、子どもたちの喜びとなり、次の活動へと発展していったのです。与えられたのではなく、子どもたちが主体的に取り組んだのは、人を元気にする、真っ赤なトマトだったからだだと思います。

受賞理由



震災以降、生活環境が大きく変わり、子どもたちも先生方も不安な毎日を過ごしていたと思います。そんな中でも、子どもたちは地域の人たちを元気付けようと、前向きに活動に取り組み、大きな成果を挙げたたくましい姿には、ボクも勇気づけられました！

カレンダー形式でまとめているもおもしろいアイデアだね。15人で12か月分をまとめるのは大変だったと思うけど、ていねいに調べ学習をしたことが、カレンダーにちゃんと記されていたよ！おもてなしの心が伝わるステキなカフェで、「凛々子」の赤い色が下郷町のみなさんを元気づけられたのであれば、大変光栄です！！